

第9回日本ジオパーク全国大会アポイ岳大会参加報告

はじめに アナログ世代に育った者にはHPから情報を得て、インターネットでの参加登録の手続きの煩雑さに音を上げ、事務局経由の登録をお願いした。これがジオ協の参加費補助申請の意味も含んでいたのか、事務局長より参加支援金決定の通知をいただき、ジオ協派遣の立場での参加となってしまったが、支援に相応しい活動が出来ず、心苦しい思いである。大会HPにオーラル&ポスター発表の案内が含まれていることに気づかず、事務局より費用支援の代償としていずれかの発表依頼があれば、当然減災をライフワークとしている立場上、役どころを得て有珠山ジオパークの事例を発表できたのに、ただの参加者で終始して恐縮の思いです。当地でのプレジオツアーが減災をテーマとした本大会の分科会にジョイントするとのことで、6、7日共に第一分科会に参加したためオーラル&ポスター発表参加に時間が取れず、後で資料を見る限り地元参加の洞爺湖有珠山GPの発表がなかったねと指摘され、赤面の思いであり、申し訳なく思う。併せ参加支援金の減額を願う。

10月5日 12:00 壮瞥発、宿泊地浦河に向かう車中より胆振東部地震罹災状況を視察。厚真地区の道路沿いで目にしたのは、歴史的な堆積火山灰層の崩れと道路の波状凹凸であり、民家等の崩壊は目にできなかった。鶴川は住宅被害顕著であるとのことであったが時間の都合上、避難施設への慰問等に至らなかった。国道の電光掲示には全国大会案内が輝き、ホテル他各所に歓迎ポスターが掲載され、訪問者へのおもてなしの心が感じられた。



10月6日 8:00 より参加者の受け業務に就く。これは道内5GPで担当する。多方向からのシャトルバスの到着ごとに各ブロック毎に窓口が混雑する。本大会は25号台風直撃の懸念の中で実施された



が飛行機利用を含めほぼ全員オン・タイムで来着。10:00 より中央公民館文化ホールを会場に**開会セレモニー**で坂下様似町長を嚆矢として関係者の挨拶、来賓挨拶・紹介等がつづいた。それに先立ち様似GPとして大切に位置づけられているアイヌ民族のムックリ演奏、歌舞踊が紹介された。最近とみに組み込まれてきた原住民文化であるが、様似の保全・育成は突出していると感じた。



基調講演 基調講演はギリシャからお招きした世界ジオパークネットワーク協会会長のニコラス・ゾウロス博士が「ジオパークの魂」と題して同時通話で1時間の熱弁を振るわれた。これまでの10年を振り返り、これからの10年に向けてジオパークのあるべき姿について語られた。ユネスコGPとしてイエローの我がGPとしては大変重い投げかけであった。冒頭、世界遺産の枠に包含できない全く別の枠組みで世界ジオパークが構築されたことを強調され、多くのスライドで提示された。

GGNの組織

Global Geoparks Network
International Association – Partner of UNESCO

STRUCTURE OF THE GGN Association

- General Assembly
- Executive Board
 - President
 - Two Vice-Presidents
 - Treasurer
 - General Secretary
 - 8 Members
- Advisory Committee
- International Working Groups / Task Forces
- International Conference on Geoparks
- Regional Geopark Networks
- National Geopark Committees
- Operational Secretariat

2018 年度新規認定のUG

New
UNESCO Global Geoparks 2018

Announced by the UNESCO Executive Board in April 2018

- Beaujolais FRANCE
- Cao Bang VIETNAM
- Ciletuh - Palabuhanratu INDONESIA
- Famenne- Ardenne BELGIUM
- Gangwushan - Nuoshulhe CHINA
- Huanggan Dabieshan CHINA
- Izu Peninsula JAPAN
- Mudeungsan REPUBLIC OF KOREA
- Ngorongoro-Lengai TANZANIA
- Perce CANADA
- Satun THAILAND
- Rinjani Lombok INDONESIA
- Conca de Tremp Montsec SPAIN

38ヶ国 140ヶ所

GGNのワーキング・グループ

UNESCO Global Geoparks

140 in 38 Countries

73 in Europe
58 in Asia and Pacific
4 in Latin America and Caribbean
3 in North America (Canada)
2 in Africa

GGN Working Groups

- WG on Geoparks in Volcanic areas (Chair : S. Nakada)
- WG on Geo-hazards (Chair : M. Watanabe)
- WG on Geological heritage assessment (Chair I. Komoo)
- WG on SDG's (Chair : X. Jin)
- WG on Education (Chair : H.M. Barrera)
- WG on Tourism (Chair : M.L. Frey)
- WG on Island Geoparks (Chair : K. Nobe)
- Communication Commission (Chair : N. Zouros)

ジオツーリズムの定義

Geo-tourism definition

Geotourism should be defined as tourism which sustains and enhances the identity of a territory, taking into consideration its geology, environment, culture, aesthetics, heritage and the well-being of its residents.

AROUCA 2011
GEO-TOURISM IN ACTION
09 - 13 NOV - PORTUGAL

ツーリズムにおけるGPの先進的NW

Geopark enterprise network in tourism

- Locally operating entities such as tourist agencies and enterprises, agro-tourism cooperatives, local hotels and BB accommodation, restaurants, enterprises operating in outdoor activities and nature tourism, local product and handcraft enterprises should have permanent collaboration and networking with the Geopark managing body in order to achieve concrete results on high quality services for Geopark visitors.

評価と再確認

Evaluation and Revalidation

- Submit an application dossier accompanied by Doc A
- Desk top on International value of geology
- Field evaluation mission by 2 evaluators from different countries
- Decision by UNESCO Global Geopark Council
- Final justification by the UNESCO Executive Board
- One year before 1page progress report.
- Revalidation dossier accompanied by Doc A and Doc B
- Submission to UNESCO Global Geoparks Secretariat before February 1st
- Field revalidation mission by 2 evaluators from different countries
- Decision by UNESCO Global Geopark Council

この手順はなぜ厳しいか

Why is this procedure crucial?

- To develop international tourism?
- To be promoted globally through GGN as a sustainable tourism destination?
- To follow international standards in Geopark services?
- To keep a high quality in operation of the Geopark management structure?
- To be effective in contribution to the sustainable local development and the creation of new jobs?

GGNの共有すべき活動

GGN common activities

- International Geoparks Conference
- Regional Geopark Conferences and Workshops
- GGN Best Practice Awards
- GGN Capacity Building Activities
- Participation in Tourist fairs
- GGN website
- GGN Newsletter
- Common publications

SDGs: 持続可能な開発目標) 17のキーワード



2030年の達成を目指す世界共通目標

ゴール11: 住み続けられるまちづくりを

都市と人間の居住地を包摂的、安全、強靭かつ持続可能にする

ターゲット

- 11.1 2030年までに、すべての人々の、適切、安全かつ安価な住宅および基本的サービスへのアクセスを確保し、スラムを改善する。
- 11.2 2030年までに、脆弱な立場にある人々、女性、子ども、障害者、および高齢者のニーズに特に配慮し、公共交通機関の拡大などを通じた交通の安全性改善により、すべての人々に、安全かつ安価で容易に利用できる、持続可能な輸送システムへのアクセスを提供する。
- 11.3 2030年までに、包摂的かつ持続可能な都市化を促進し、すべての国々の参加型、包摂的かつ持続可能な人間居住計画・管理の能力を強化する。
- 11.4 世界の文化遺産および自然遺産の保全・開発制限取り組みを強化する。
- 11.5 2030年までに、貧困層および脆弱な立場にある人々の保護に重点を置き、水害などの災害による死者や被災者数を大幅に削減し、国内総生産比で直接的経済損失を大幅に減らす。
- 11.6 2030年までに、大気質、自治体などによる廃棄物管理への特別な配慮などを通じて、都市部の一人当たり環境影響を軽減する。
- 11.7 2030年までに、女性・子ども、高齢者および障害者を含め、人々に安全で包摂的かつ利用が容易な緑地や公共スペースへの普遍的アクセスを提供する。
- 11.a 各国、地球規模の開発計画の強化を通じて、経済、社会、環境面における都市部、都市周辺部、および農村部間の良好なつながりを支える。
- 11.b 2020年までに、包摂、資源効率、気候変動の緩和と適応、災害に対するレジリエンスを目指す統合的政策および計画を導入・実施した都市および人間居住地の件数を大幅に増加させ、仙台防災枠組2015-2030に沿って、あらゆるレベルでの総合的な災害リスク管理の策定と実施を行う。
- 11.c 財政および技術的支援などを通じて、後発開発途上国における現地の資材を用いた、持続可能かつレジリエントな建造物の整備を支援する。

基調講演は実践例を含め総論・各論多岐にわたり展開された。防災・減災では洞爺湖有珠山GPにおける火山マイスターについて高く評価するコメントがあり誇らしく思った。本報告書では今後のジオパーク運営について参考にすべきスライドのみ変え際するにとどめる。

最後に提示されたSDGsの17項目はうなずける部分があるが、各項目の陰に詳細なゴール目標があり（最後のスライドは分科会で提示

されたものを参考に添付) これらが GGN の認定評価の指針とされるのであれば、ジオパークであり続けることの難しさを痛感する。



午前の部を終え、地元の方々が出店している物産コーナーにて昼食をゲット。洞爺湖文化センターを会場に開催した第2回大会では強い降雨に襲われ、準備した物産ほとんどが販売できなかった苦い思い出が残る。様似も13:30の閉鎖後、台風25号の襲来を懸念し、すべてのテントが撤収された。7日の物産販売は役場庁舎の狭隘なスペースを利用して実施。大会終了後のお土産購入を予定した参加者も目的が果たせなかったようで気の毒であり、残念であった。

口頭発表セッション 発表リスト(会場: 様似図書館)

No.	題目	時間	コーディネーター	発表者	題目
1	14:00~14:15	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
2	14:15~14:30	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
3	14:30~14:45	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
4	14:45~15:00	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
5	15:00~15:15	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
6	15:15~15:30	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
7	15:30~15:45	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
8	15:45~16:00	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
9	16:00~16:15	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
10	16:15~16:30	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
11	16:30~16:45	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
12	16:45~17:00	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
13	17:00~17:15	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
14	17:15~17:30	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
15	17:30~17:45	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性
16	17:45~18:00	藤田 光 (札幌大)	山田 隆	山田 隆	防災教育の重要性

14:00～ 分科会、オーラル&ポスター (小中校生のコアタイム) が重なった。特に第1分科会は洞爺湖有珠山ジオパークが担当した「減災文化と火山の恵み」プレジオツアーとの連動企画とあり、地元参加者として各地から参加頂いた19名の意見・問題提起があるものと思ひ会場である様似小学校体育館に移動した。

ポスターセッション

No.	題目	発表者	No.	題目	発表者
1	下志ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	21	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
2	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	22	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
3	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	23	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
4	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	24	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
5	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	25	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
6	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	26	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
7	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	27	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
8	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	28	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
9	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	29	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
10	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	30	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
11	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	31	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
12	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	32	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
13	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	33	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
14	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	34	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
15	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	35	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
16	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	36	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
17	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	37	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
18	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	38	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
19	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	39	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆
20	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆	40	洞爺湖ジオパーク / 山田 隆	山田 隆

私見 洞爺湖有珠山 GP では小中高で防災教育を実施している。特にジオ協が関わって実施されたアポイと当地の小学生との交流研修会に参加した子供たちに全国 GP 関係者の集う久しぶりの地元(北海道)開催の機会に研修成果を発表する機会としたかった。

第1分科会 コーディネーター：島原半島 GP 大野希一氏 洞爺湖有珠山 GP 加賀谷にれ氏
プレジオツアー参加者のアンケートを集約してジオ協事務局中谷氏が「洞爺湖有珠山プレジオツアーの概要報告」と題して発表された。冒頭、加賀谷コーディネーターより、いわゆる天変地異は生きた地球

洞爺湖有珠山GPの「減災・防災」の課題

① 噴火を持って繰り返す活火山との共生

- ・ 教育(住民・子どもたち対象)、正しい知識の共有
- ・ 怖がるだけでなく「恵み」も理解

近い過去の噴火時の映像や今も活動しているシーンを発信する火山との共生のメリットデメリットを知り、情報の共有、判断力を身に付ける、親類・友人と時々話し合える時間をつくる。

教育(過去の出来事、人の行動を学び未来を考える、今は被災していないものも、将来被災する可能性)火山とはどういふものか、正しい知識を住民で共有する命を守ることを最優先とした災害の記憶の伝承と防災の担い手育成伝えていくこと、洞爺有珠は体的動向にできているイメージを持ちました。

噴火のメカニズムを住民にもよく知ってもらう被災・避難・生活再建は身近な問題、大事なことはリスクをゼロにすることではなく、命を守り暮らしを支えあうこと。

ハザードマップをちゃんと学ぶ？疑問、心配を出す、明らかにする住民を対象にした大山学習

20~30年に1度噴火することがわかっているのに、子供たちも自分ごととして理解できるのが素晴らしい、正しく学び正しく備える。怖がるだけでなく「恵み」を理解する。

洞爺湖有珠山GPの「減災・防災」の課題

② 災害遺構の整備とメンテナンス

A案) 自然のままに残す(草刈りは最小限)
B案) 覆屋を作るなどして保存する
疑問) そもそも保存できるのか?

遺構の問題は、また噴火すれば埋没しサイトがなくなると思えば、お金をかけて整備する必要はあってもよいのでは、地域の子も一緒に考えてみるこのようにメンテナンスをしているかの理由と手法(写真や映像などで)を発信

活動期間が長い場合、遺構をそのまま残す跡地以外の建物等のメンテナンスはそもそもできるのか? 命を賭かたうえで、復讐のみに入れることも考えるべき

その遺構で何を伝えるのかには方法が違う、災害の歴史を伝えるなら遺構としてメンテナンスを行うべきある程度人が手を触れること、ならすべてにではなく、伝える必要がある場所には行って行うことが望ましい、被害に埋もれる前に調査を済ませる

維持管理は人的・経済的に無理のない方法によるべき、持続可能性を考える、原案案の遺構は、被災者の人々の気持ちの一つに受けたいので難しいメンテナンス費用はアンケート形式で費用をとり戻してよいのでは? 火山遺構公園のような整備がなされた

災害遺構は一つで、代わりがよい、そのため、それを残すことを優先するよいのでは、災害遺構を今後守り続けるならそのままの状態をキープすることに全力を尽くすべきと思う。

の必然的な自然現象であり、自然現象を封じ、防ぐ

洞爺湖有珠山GPの「減災・防災」の課題

③ ガイド需要への対応(数の確保)

若手が参加しやすい環境づくり(当地では需要が少なくガイドになっても仕事がないという背景)

エリア別・専門別のガイドを育成してもよいのでは? 自地域と比べ大ききポイントとなる場所も多い、ガイド需要が増えるのはよいことだと思うが、技術面、管理面等大きくなれば問題はでてくると思う、それはその時試行錯誤しながら進めていければと思う。

ガイドを使う経験がある方は、旅がより充実することをよく知っている

数より質が求められると思っている。ガイドのプロ化(ボランティアという立場の廃止ができれば)ガイド=元氣な人、という先入観を捨ててもよいのでは? ピアの視点で障害のあるガイドが活動するのもありでは?

火山と人との知識を持つガイド

バス運転手さんやロープウェイスタッフへのガイド講習

洞爺湖有珠山GPの「減災・防災」の課題

④ ガイド(案内役)のレベルアップ

予想以上に外国人が多いので外国語で伝えるのが大変そうだった、やっぱりガイド養成するしかない、定期的なレベルチェックと、専門家からの正しい、新しい情報の共有アプリ・映像の活用が基本データの復習にもなると思う

各地域に熟練のガイドが存在し、行政等とつながっていると思う

学習(学習の場の提供、自主学習できる体制)ガイド講座、実践、人気ガイドの補佐

他地域とのガイドとの交流、刺激をうけることでモチベーションアップ、専門性を伸ばす研修の実施ある程度、専門的な知識が必要だと思うので、知識面でのフォローが必要だと思う、ただし、「伝える方法」が市場だと思うので、そういった学習も必要だと思う。

大人は時間がないので、ビデオ等でできるだけ楽して知識を得たい会員あてメールにおすすめの動画のURLを添付する

お金をとる、生活することを旨とする環境、ベースとなる部分のアップデータでは? 数をこなすしかない

ガイド応力はもともと持つコミュニケーション力が大きく関係していると思うが、場数を踏むことでレベルは上がると思う。

という「防災思考」から、ジオパーク的に自然を学び、理解することから災害を減らす「減災」を考えたいという提言を参席者が共有した。

第1分科会のテーマに沿い坂之上浩幸「霧島 GP」、佐藤秀和「栗駒山麓 GP」、石松昭信「阿蘇 GGP」、仲江高丸「南紀熊野 GP」、白井里佳「伊豆大島 GP」と5件の災害事例が発表された。14:00~16:00という限られた時間で、コーヒー・ブレイクを14:00~16:00という限られた時間で、コーヒー・ブレイクを含めると、個々の発表に質疑応答を重ねることが出来なかった。

雨天の中、分科会会場よりシャトルバスで中央公民会に戻り、残余の時間第二体育館でのポスターセッションを駆け巡る。上富良野高校生 3 人による『ボランティア登山の取り組みについて』という十勝岳の活用・安全・防災・ジオ資源につき、JGNで認可されなかったにもかかわらず、若い力が【十勝岳ジオパーク構想】を後押ししようとする発表に敬意を表した。また阿蘇GPではわかりやすい防災ガイドマップをゲット。防災科学技術研究所 NIED のブースでは本年 6 月 26 日公表の《全国地震動予測地図（確率論的地震動予測図）》を入手できた。これによると北海道西方沖、南西沖 M7.5 超の地震の起きる確率はほぼ 0 %とあった。時間切れで中央体育館での**交流会**会場に向かう。地場食材に拘った鹿肉・ツブ・芋餅・タコ・・・等多くの地域ボランティアで準備された手作り感のある美味であった。全国 GP から持参された銘酒、珍味等が披露され、賞味自由の様であった。ただ立食で会場に椅子の準備がゼロで私には苦痛であった。また体育館であるため出席者の交流の声、司会者や来賓の高橋知事の挨拶等がハモッて内容が聞き取れなかった。

が、人口 4,200 の町に 674 人もの GP 関係者が集い、200 人余のスタッフとベストに記された方々が参加者の安全を守るために雨中に立ち、段差では「足元にお気を付けください」と声をかけ、地理不案内の私たちの案内等、「おもてなしの心」が横溢した大会初日であった。

10月7日

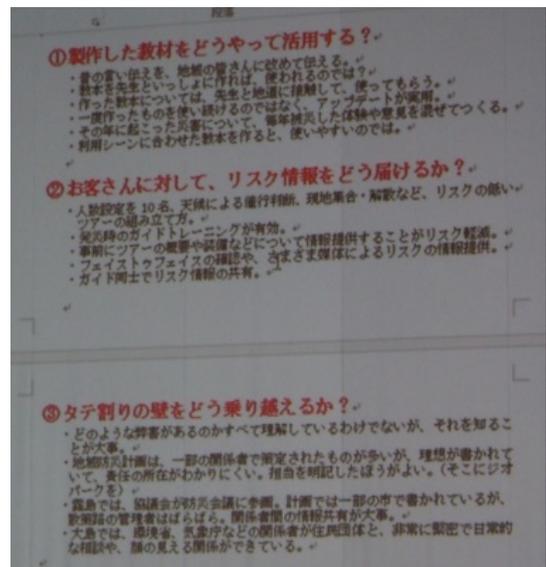
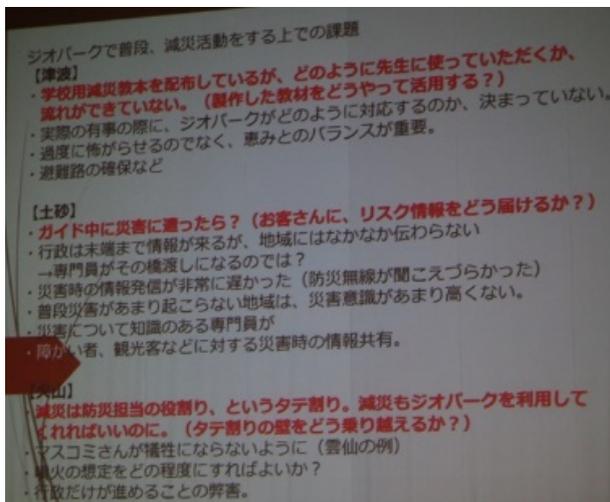
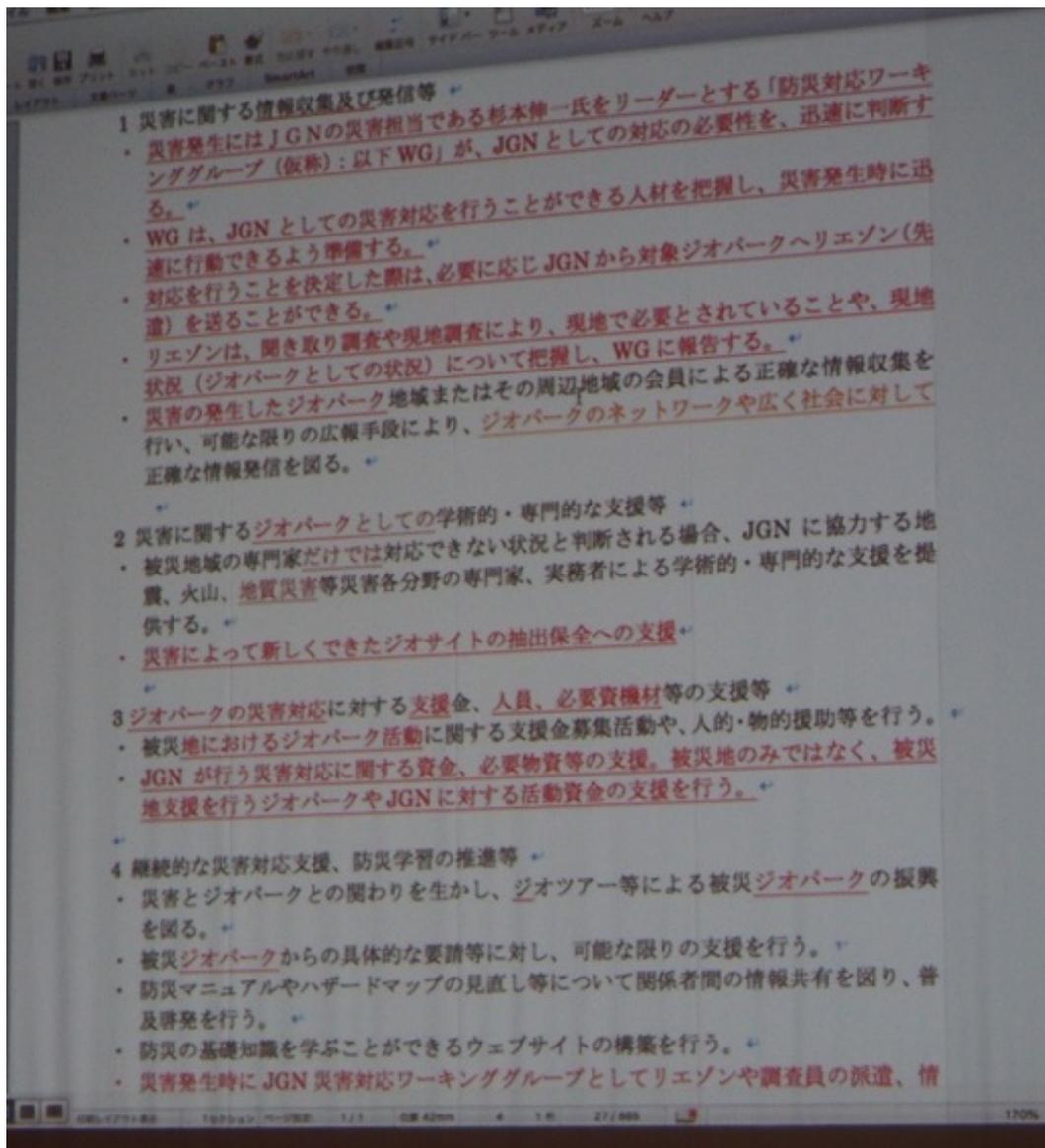
初日の流れで台風余波の降雨の中様似小学校体育館での「減災・防災」をテーマとした第 1 分科会に向かう。コーディネーターは横山光、加賀谷にれ両氏である。災害別に座席が指定された中で冒頭はコーヒーマグ・ブレイク的な自由トークが行われた。防災関係者（組織）の縦割りの欠陥がキーワードとして共通理解された。伊豆大島 GP 研究会の田附克弘代表の現状コメントに羨ましいものを感じた。伊豆大島という離島故、測候所関係者、研究者、行政関係者、防災関係者、民間が自ら好んで GP に参画しているという。2000 年有珠山噴火まではお互い顔の見える関係で死傷者ゼロの偉業を達成したが次第に霧散、再構築のためエコミュージアムからジオパークの構築を目指したが、構成団体間のミゾが埋まらず、次期有珠噴火に懸念を持っているとコメントした。

本分科会はワークショップ的にグループの議論を集約する準備がされていたが、災害別グループも土砂・津波・噴火・地震が混在。例えば「土砂災害」と括ってもその発生原因が、降雨（ゲリラ豪雨、台風、ダム決壊、山崩れによる洪水、土石流、火山噴火に伴う一次泥流・融雪泥流・山体崩壊によるもの等複雑に絡み合い一元的に意見を交換し、まとめるに至らなかった。横山光コーディネーターの冒頭のコメント

通り、多様な人々が多様な意見を述べ合い、その意見を各自が集約する機会としては有効であった。



添付スライドは加賀谷氏が参加者の意見を速記



提示されたものである。体育館という悪条件のスクリーン撮影で、全国大会不参加の方々に事務局のPCに保存されている元データを何かの機会に提示いただけると参考になろう。

終了時間直前に JGC メンバーの中川和之さんから防災対応 WG としてまとめた防災対応マニュアルが提示されたが、検証議論に至らず、閉会。分科会会場で準備された幕の内弁当を賞味し、中央公民館でのパネルディスカッション会場に移動した。

13:00～ パネルディスカッション コーディネーター:目代邦康氏 北海道博物館:栗原憲一

6名のパネリストがそれぞれの立場からのコメントを頂いた。議論の詳細は、大会参加に佐藤窓氏がVTRで全記録を残しコピーを提供いただいているので、今後何かの機会に供用できればと考えている。本パネルディスカッションで私が最大の興味を持ったのは栗原憲一氏が提示された、本大会のテーマ「これまでGPの10年、これから進むべきGPの10年」を見える化シートで具現化する手法であった。本大会受付時に全員に配布された17の設問シートをどう生かすのだろうかという事が関心事であった。A:地質と地形、B:運営体制、C:情報と環境教育、D:ジオツーリズム、E:持続可能な地域経済・地域活動。F:防災・減災という主項目に、AからEには各3小設問、Fには2小設問。各小節門にとってもからあまりまで25%区切りの自己評価をするようになっている。注記として各GP毎に意見を集約して7日、12:30までに1票を投票箱に投入して下さいとあった。という事で、何時か呼びかけがあるものと思っていたが、ないままに会場に臨んだ。ディスカッション終盤に本スライドが提示された。どなたかが代表して投票頂いたのであろう、洞爺湖有珠山ジオパークも色付けされて含まれていた。



これまでの活動を振り返り、これからの10年を歩む上での目指すべき理念や方向性を議論する。

1. 見える化シートをつかい、これまでの10年を振り返る。

項目	地域と地理			運営体制			情報と情報政策			ジオツーリズム			関係者との関係性・協働			評価・測定	
	A-1	A-2	A-3	B-1	B-2	B-3	C-1	C-2	C-3	D-1	D-2	D-3	E-1	E-2	E-3	F-1	F-2
地域																	
運営																	
情報																	
関係																	
評価																	
測定																	

私見 GP構想以来かかわってきた者として「見える化シート」を拝見すると、GGN再審査でイエローカードをいただいている以上運営体制に弱点があるのは明瞭であるが、その他すべての項目でグレードアップが迫られていると認識した。基調講演でゾウロスが今後のPKの10年に課題が提示された。SDGsを含め衆知を集め未来型の洞爺湖有珠山GPの検証が必要であろう。

本スライドに表記されている3の問題提起は、私として目にするはじめてのもので、全国各地のジオ

パークを支える人々の抱く「？」で、GP 認定の透明化のため、関係者での議論が不可欠と思った。

閉会セレモニー アポイ大会アピール(別添付)と次年度の第10回大分大会への来訪の呼びかけで幕を閉じた。

